



**Data**

監督・脚本: アダム・マックエイ  
 出演: クリスチャン・ベール/エイミー・アダムス/ステイヴ・カレルサム・ロックウェル/タイラー・ペリー/アリソン・ビル/リリー・レープ/リサ・ゲイ・ハミルトン/ジェシー・プレモンス/ジャスティン・カーク/エディ・マーサン

## 👁️👁️ みどころ

副大統領の仕事は大統領が死ぬのを待つこと。しかし、ジョンソン副大統領はJ・F・ケネディ大統領が暗殺されたことによって表舞台に。それに対し、ディック・チェイニー副大統領は、ジョージ・W・ブッシュ大統領の仕事(実務)をハイジャックすることによって、“影の大統領”に！すると、2003年3月のフセイン打倒＝イラク開戦の決断は誰が・・・？

小泉純一郎元総理も変人・奇人だった(?)が、チェイニーもラムズフェルドもかなりの変人・奇人。両者がブッシュ政権下で、パウエル國務長官、ライス大統領補佐官という“良識派”の連合軍と対峙する姿に注目！

『マシニスト』(04年)で30キロも減量して役作りに挑んだクリスチャン・ベールは、本作で20キロ増量。ボソボソとささやくその姿は、演説下手の裏返しでもあるが、その策士ぶりは如何に・・・？

日本で面白い政治ドラマが少ないのは政治の劣化が主な理由だが、現在のトランプ大統領の政治がドラマでいっぱいなのも、ブッシュ政権下の「バイス」が今これだけ注目されるのも、アメリカの民主主義が機能していることの証左だ。こんな面白い映画は必見！なお、私的には『ボヘミアン・ラプソディ』のラム・マレックではなく、本作のクリスチャン・ベールこそ第91回アカデミー賞主演男優賞にふさわしいと思ったが・・・。



## ■□ VICE (バイス) ってナニ? チェイニーって誰? ■□

日本人の多くは中学一年生から英語を学んでいるにもかかわらず、英会話はもちろん実

用的な英語が全く使えないから情けない。したがって、本作のタイトル『VICE』を見て「バイス」とは読めても、その意味が分からない人がほとんどでは・・・？

VICEとは、プログレッシブ英和辞典（第4版）によれば、①悪徳、不道徳、邪悪、②性的不道徳、③（組織・制度・性格・文体などの）欠陥、欠点、④（馬などの）悪い癖、⑤（英国の教訓劇の）悪玉だが、VICE PRESIDENT（バイス プレジデント）は副大統領のこと。したがって、本来なら本作のタイトルは「VICE PRESIDENT」とするべきだが、アダム・マッケイ監督は大きな皮肉を込めて、「VICE」である特定の某副大統領のことを狙ったらしい。

大統領を描いた映画は多いが、副大統領を描いた映画は少ない。近時の『LBJ ケネディの意志を継いだ男』（16年）（『シネマ43』掲載予定）は面白かったが、タイトルだけでそれがリンドン・B・ジョンソン副大統領を描いた映画だとわかる日本人は少なかったはずだ。しかして、「VICE」とタイトルされた本作の副大統領はダレ？それは、第43代大統領ジョージ・W・ブッシュ（息子ブッシュ）（2001-2009）の副大統領だったディック・チェイニーのことだ。ジョンソン副大統領は1963年11月22日にジョン・F・ケネディ大統領がダラスで暗殺されたことによって大統領に昇格して有名になったが、チェイニー副大統領は2001年の9.11世界同時多発テロで①首謀者とされたアルカイダの指導者オサマ・ビン・ラディン捜索の指揮をとり、②2003年3月、サダム・フセイン政権打倒を掲げたイラク戦争の指揮をとったことで有名になった。もちろん、この両者の決断はブッシュ大統領によるものだが、実はその決断はチェイニー副大統領がブッシュ大統領に代わって下したもの・・・？そのため、巷ではチェイニーは「影の大統領と呼ばれた男」とされ、本作のパンフレットにもそう書かれている。しかして、その実態は？

ブッシュ大統領は小泉純一郎元総理と大いにウマが合ったらしく、2006年6月の最後の訪米で、両首脳は日米関係の重要性を再確認した後、大統領専用機エアフォース・ワンと一緒にエルビス・プレスリーの生前の邸宅グレースランド（テネシー州メンフィス）を訪れた。プレスリーが大好きな小泉総理は、そこでサングラスをかけ、プレスリーの娘リサ・マリーの肩を抱いて、プレスリーの曲の一節を次々と歌ったそうで、その風景は両首脳の蜜月ぶりを示すものだった。もっとも、そのレベルの低さに眉をひそめる向きも多かったようだが・・・。そこで子供のようにはしゃいでいた小泉首相の人物像は多くの日本人が知っているが、J・W・ブッシュ大統領の真の人物像は？本作を観ていると、どうしようもないバカで、2世のボンボンのようなのだが、さて・・・？

## ■□■変人・奇人のチェイニーとラムズフェルドに注目！■□■

キューバ危機におけるケネディ政権の対応をリアルに描いた『13デイズ』（00年）（『シネマ1』63頁）を観ると、司法長官を務めていた弟のロバート・ケネディが常にJFKの

側に仕えており、そこにジョンソン副大統領は全く登場していなかった。奇しくも、『LB J ケネディの意志を継いだ男』で有名になったセリフは「副大統領の仕事は大統領が死ぬのを待つこと」だったが、そのことが『13デイズ』を観ればよくわかる。しかるに、なぜ本作の主人公ディック・チェイニー（クリスチャン・ベール）は、ブッシュ大統領の副大統領指名を受けて、共に大統領選挙に立候補したの？それが本作後半のテーマになるが、本作前半では若き日の野心溢れるチェイニーとその政治の師となった دونالد・ラムズフェルド（スティーヴ・カレル）に注目！

9. 11直後の混乱の中、イラク開戦を主導したのがチェイニー副大統領とラムズフェルド国防長官で、最後までそれに反対したのがコリン・パウエル国務長官（タイラー・ペリー）とコンドリーザ・ライス国家安全保障問題担当大統領補佐官（リサゲイ・ハミルトン）だった。そして、パウエルとライスはアメリカの良心を代表する人物と評価されているのに対し、チェイニーとラムズフェルドは「イラクのサダム・フセインは大量破壊兵器を持っている」というウソをついてでも、イラク開戦を主導した、如何にも曲者とされている。

チェイニー副大統領を主人公にした本作でも、冒頭から「チェイニーはあまりにも秘密が多いため、どこまで真実に迫れたかは自信がない」旨の“弁解”からスタートするから面白い。ケネディやオバマのような雄弁家は、演説を聞けばそれだけでわかりやすいが、口数が少ないうえ、ボソボソとしかしゃべらないチェイニーはなぜ政治家になり、副大統領になり、そして“影の大統領”にまでなれたの？それを理解するためには、本作導入部で描かれる、ろくでなしの大学生だったチェイニーが連邦議会のインターンシップに参加し、リチャード・ニクソン政権の大統領補佐官に就任したラムズフェルドから、①口は堅く、②指示を守れ、③忠実であれ、という“部下としての3ヶ条”を徹底的にたたき込まれる姿に遡る必要がある。チェイニーの政治の師はラムズフェルドなのだ。本作では、何よりもそんな変人・奇人のチェイニーとラムズフェルドに注目！

## ■悪妻？恐妻？いやいや、恐ろしい野心家の良妻賢母！■

『ハムレット』『オセロー』『リア王』と並ぶシェイクスピアの4大悲劇の1つである『マクベス』は、将軍マクベスが妻と謀って主君を暗殺し王位に就く物語だが、そこではマクベス夫人が、勇猛果敢だが小心な一面もある夫マクベスの尻をたたくことで大きな役割を果たしている。それと同じように、本作でチェイニーが政治家としてのし上がり、副大統領として事実上、大統領職をジャックするについては、妻リン・チェイニー（エイミー・アダムス）が大きな役割を果たすので、それに注目。『ビリーブ 未来への大逆転』（18年）でみた女性弁護士ルース・ギンズバーグは、今なお86歳でリベラル派の最高裁判事として働いているが、1956年にハーバード大学法科大学院に入学した当時は500人の学生のうち女性が6人で、女子トイレすらなく、男女差別が酷かったらしい。そんな中で彼

女は、同じく法律を学びエリート弁護士になった夫と結婚した。

しかし、本作に登場する若き日のリンは、自信たっぷりで野心たっぷりなのはギンズバーグと同じだが、付き合っている男が酒飲みでろくでなしのチェイニーだったから、アレレ・・・。2度目に警察からチェイニーを引き取る際に、リンが、「もう愛想が付きたわ」と罵ったのは当然だ。それに対して、チェイニーは「二度と君を失望させない」と誓ったが、さて・・・？ 弁護士45年の私の経験からすると、「2度あることは3度ある」のパターンの方が多いが、どうもチェイニーは例外だったらしい。もっとも、そうなるについては、前述したワシントンD. C. で連邦会議のインターンシップに参加したチェイニーが共和党の下院議員ラムズフェルドの型破りなスピーチに惚れ込み、彼を“政治の師”としたことが大きかったらしい。まさに、ラムズフェルドのような変人・奇人の男の下で権謀術策を学び実践していく生き方が彼にピッタリだったわけだ。

『ビリーブ 未来への大逆転』で見たギンズバーグは優秀なサラブレッドの夫の弁護士活動とは別に、女性差別と闘う訴訟に全力を傾けたが、本作のリンは夫チェイニーの政治活動を支えるための活動を精力的に続けたからすごい。そんなリンの活動は“内助の功”を大きく超えてマクベス夫人に近いが、重要なことは2人の間で共通の目標がきっちり固まり、それに向かっての行動が2人の間で十分意思疎通されていたことだ。議員に当選するには弁の立つことが必要だが、残念ながらチェイニーは演説は下手クソ。しかし、それを十二分に補ったのが、作家志望でもあったリンの弁論能力だ。しかして、あの酒浸りでろくでなしだった学生が、インターンとしてラムズフェルドの薫陶を受けた後は、ニクソン政権下で大統領補佐官に就任したラムズフェルドの下でホワイトハウスに自分の執務室を獲得するまでに・・・。もっとも、“二大政党制”のアメリカでは、民主党と共和党の大統領が変わるたびに、ホワイトハウスのスタッフも総入れ替えになるのが常。さあ、チェイニーがリンと共に歩む（リンのムチの下で走る）政治家としての、その後のステップは・・・？

## ■□■ マッケイ監督の風刺色に注目！しかし後半は真剣に！ ■□■

アダム・マッケイ監督の『マナー・ショート 華麗なる大逆転』（15年）はサブプライムローン（低所得者向けの住宅ローン）の「破綻」を予測した4人の主人公が、CDS（クレジット・デフォルト・スワップ）の買占めに走るという「逆転の発想」が面白い映画だった（『シネマ 37』232頁）。しかし、もともと金融問題に切り込んだ映画は難しいうえ、この4人の主人公に対しては『ウォール街』（87年）や『ドリーム ホーム 99%を操る男たち』（14年）（『シネマ 37』236頁）の主人公と同じような“共鳴度”を持つことができなかったのが少し難点だった。それに対して、現職の大統領や副大統領を描いた映画は、『13デイズ』のような正統派があれば、マイケル・ムーア監督の『華氏119』（18年）のような風刺色いっぱいの異端派（？）（『シネマ43』掲載予定）もある。また、ジョンソン副大統領を描いた『LBJ ケネディの意志を継いだ男』は正統派だったが、アダム・

マッケイ監督の本作はマイケル・ムーア監督ほど極端ではないが、風刺色が極めて強いので、それに注目！

ちなみに、心を入れ替えた夫の尻をたたき、権力を目指して共に上昇していこうと夫婦で誓うシークエンスは、シェイクスピアの『マクベス』風の会話劇がピッタリだとみたアダム・マッケイ監督は、そんなシークエンスも本作のサービスで用意してくれているので、しっかり楽しみたい。もともと、近時の安っぽい邦画のように、チェイニーの内心の思惑をその都度モノログで語るなどという野暮をすれば最悪だから、そんなバカな演出はしていないが、本作ではアダム・マッケイ監督特有の風刺色に注目！ちなみに、ニクソン政権下では大統領補佐官ラムズフェルドの一スタッフに過ぎなかったチェイニーは、2001年からのJ・W・ブッシュ政権下では副大統領となり、ラムズフェルドはチェイニーの推薦によって国防長官を務めたが、2人間の力関係はかつてのそれとは大きく変わっていたはず。したがって、性格こそ変人・奇人で共通していた2人が、そんな状況下でどのように協調もしくは反目したのかは興味深い。しかし、どうもそれは、ブッシュ大統領をトップとし、パウエル国務長官＋ライス大統領補佐官の連合軍 vs チェイニー副大統領＋ラムズフェルド国防長官の連合軍という対立構造の前には小さな問題だったらしい。したがって、前半は風刺色が強かった本作も、後半は9.11後のイラク派兵＝開戦に向けて、まさにバイス＝チェイニー副大統領の獅子奮迅の真面目な指揮ぶり(?)が最大の注目点になるので、それを真剣に観察したい。

## ■□■議員内閣制の限界は？一元的執政府論とは？■□■

アメリカ、フランス、韓国は大統領制だが、イギリスと日本は議院内閣制（ドイツも議院内閣制だが、大統領もいる）。去る4月7日の大阪市の知事、市長、府会議員、市会議員選挙では、「大阪維新の会」が圧勝したが、市議会で過半数を獲得できなかったため、「大阪都構想」の実現への道りはなお険しい。しかし、私に言わせれば、それは制度論だから、大阪市を解体して特別区と大阪府に再構成する大阪都構想がいいのか、それとも従来通り政令指定都市としての大阪市と大阪府が併存する方がいいのかは、ハッキリ割り切れるものではない。それと同じように、議院内閣制と大統領制のどちらがいいのかも制度論で、一方が○、一方が×というものではない。しかし、議院内閣制の日本の政治状況を見ていると、年々劣化するばかりで、これでは民主主義そのものがほとんど崩壊していると言わざるをえない。

そんな日本の政治を巡る近時の理論（キーワード）は“新保守主義”。しかし、9.11が起きた2001年当時、チェイニー副大統領が依拠した政治理論は一元的執政府論だ。パンフレットにある「映画『バイス』にまつわるキーワード」によると、これは、大統領に執政の主導権があり、議会の干渉を受けずに、さまざまな行政判断を大統領が行うことができるという理論で、合衆国憲法第2条が根拠になっている。アメリカの法学者の間で

もこの権限を「強く」認めるか、「弱く」しか認めないかの解釈が割れており、また、ブッシュ政権期に対テロ戦争とネオコンの発言権が拡大する中、外交・安保分野に適用が拡大されたようだ。民主主義の法治国家では、憲法解釈と法解釈が全ての基本になるのは当然だから、とりわけ弁護士で政治に興味を持つ方は、本作のそんな論点をしっかり勉強したい。

## ■□■私的には主演男優賞は断然クリスチャン・ベール！■□■

本作でチェイニー副大統領役を演じたクリスチャン・ベールは、『ダークナイト』(08年)のバットマン役としても有名(『シネマ21』25頁)。しかし、私にはそんな有名ではあっても誰でも演じられるような役(?)より、30キロも減量して1年間眠れない不眠症の男の役に挑んだ『マシニスト』(04年)のクリスチャン・ベールの方が印象深い(『シネマ7』382頁)。私は、同作でこの俳優の名前をきっちりインプットしたが、彼はその後、『アメリカン・ハッスル』(13年)での詐欺師役(『シネマ32』33頁)や『エクソダス：神と王』(14年)でのモーゼ役(『シネマ35』301頁)等で大活躍。そんな彼はアダム・マッケイ監督の前作『マナー・ショート 華麗なる大逆転』でアカデミー助演男優賞にノミネートされ、本作では第91回アカデミー主演男優賞にノミネートされている。本作でチェイニー役に挑んだ彼の演技者としての本領は、後半以降の副大統領への打診を受けるかどうかの物語から発揮されていく。そこでは、とりわけボソボソとささやくように短くしゃべる彼の姿に注目したい。

本来、副大統領にはチェイニーのようなタイプが適しているのだろうが、大統領がブッシュ大統領だけに、余計、副大統領の存在感が増してくるのは必定。たしかに、みんなが言うように、副大統領は大統領が死ぬのを待つだけの退屈な仕事。しかし、チェイニーがJ・W・ブッシュに「どうやら君は動的なリーダーだ。物事を勘で決める。それなら私が平凡な任務を担当できるかもしれない」とささやくと、ブッシュは喜色満面になったから面白い。そこで続いて、「官僚や軍、エネルギー政策から外交政策は任せてくれ」と言うと、何とそれもOKしたから、ビックリ！これぞまさに、大統領職のハイジャックだ。このように、大統領職を乗っ取る形で副大統領に就任したチェイニーは、かつての政治の師ラムズフェルドを国防長官に迎え入れる等、思惑通りの人事を行い、「影の大統領」としての権力基盤を固めていくわけだ。

本作でのそんなチェイニー役に説得力が出たのは、クリスチャン・ベールが演じたからこそ。すると、チェイニーにとって、2001年の9月11日に突如発生した9・11世界同時多発テロは危機？それともチャンス？ケネディが暗殺された後のジョンソン副大統領への権力継承に要した時間はわずか98分だったし、その後の行動も機敏だったが、9・11事件発生後のチェイニー副大統領が下した“ある決断”は、それよりもっと早かったようだ。さあ、そこで彼はどんな決断をしたのだろうか・・・？

なお、第91回アカデミー賞では『ボヘミアン・ラプソディ』のラミ・マレックが主演

男優賞を受賞したが、私的には、その受賞者は断然クリスチャン・ベール！  
2019（平成31）年4月16日記